ルドルフ・シュタイナー
ゲーテの自然科学論序説～並びに、精神科学 (人智学) の基礎～

Einleitung zu Goethes Naturwissenschaftlichen Schriften
Zugleich eine Grundlegung der Geisteswissennschaft(Anthroposophie)
(GA1)

第 1 章
緒論

佐々木義之訳

1787 年 8 月 18 日、イタリアにいたゲーテはクネーベルに次のように書き送っています。

ナポリ周辺やシシリア島の植物や魚たちの中に私が見たのは、もし、私がもう十歳若かったら、インドに旅してみようと思わずにはいられなかったであろう、というようなものでした - 何か新しいものを見つけるためにではなく、既に発見されているものを私自身の方法で観察するために。

この言葉は、ゲーテの自然科学論を考察するための視点を与えてくれます。彼にとって問題だったのは、何か新しいことを発見するということではなく、新しい見通しを開く、ある特別な仕方で自然を眺める、ということでした。ゲーテが数多くの偉大な発見、例えば、顎間骨の発見や頭蓋脊椎理論の提唱といった骨学上の業績の他、植物の器官と葉との間の内的な相似性といった植物学上の発見、等々を行ったのは確かです。けれども、自然についての壮大な観点こそが、これらすべての個々の業績に浸透していたところの生き生きとした魂だったのです。それらの業績はこの観点に基づいてなされました。有機体に関するゲーテの研究においては、ひとつの偉大な発見は他のすべての発見—それは有機体そのものの本性についての発見に他なりません—に影を投げかけていました。ゲーテは、ひとつの有機体が何故そのように現れるかという原則について、つまり、生命がその外的な表現へと導かれる要因について詳述しています。実際、彼は、そのようなことがらに含まれる原則に関して、あらゆることに光を当てているのです。

有機的な科学の分野におけるゲーテの努力は、初めからその目標に向けられていました。彼がその目的を追求するとき、発見は自然に生じました。ですから、彼はさらに努力を重ねていく上で、それらが妨げにならないようにしなければなりませんでした。ゲーテ以前の自然科学は生命現象の本質に気づいていませんでした。有機体を探求するとき、ちょうど無機的な現象を探求するときのように、単に部分的な組成や外的な特徴を探求するにとどまっていたのです。したがって、そのような古い科学は、しばしば詳細なことがらについて不正確な説明をし、偽りの光の下にそれらを提示してきました。もちろん、個別のことがら自体を探求しても、そのような間違いが露見したりはしません。説明的な判断は私たちが有機体を理解して初めて可能になるのです。何故なら、特殊なことがらを個々に考察しても、それらを説明する原則はそこには含まれていないからです。それらは全体としての自然を通してのみ説明され得るのですが、それは、それらに存在と意味を与えているのは「全体」であるから

です。

ゲーテは全体としての自然を発見した後で、初めてそれらの説明の間違いに気づきました。それらの説明は、生きた存在についての彼の理論とは相容れないものであり、矛盾するものだったのです。そこから少しでも先に進もうとするのであれば、そのような偏見は取り除かれなければなりませんでした。顎間骨の場合がそうです。例えば、背骨の特徴を持つものとしての頭蓋の理論のようなものがあって初めて有効で興味あるものとなる、というような事実は以前の自然科学には知られていませんでした。これらすべての障害は個別の発見を通して取り除かれる必要がありました。ですから、ゲーテの場合、これらの発見は決してそれ自体が目的ではなかったのです。それらが必要とされたのは、いつの場合でも、大いなる考えを確証するため、彼の「中心的」な発見を確認するためでした。

ゲーテの同時代人たちが結局は同様の観察を行ったこと、ゲーテの努力がなかったとしても、恐らく今日ではそれらすべてが知られるようになっていたであろう、ということを否定することはできません。しかし、今日まで、有機的な自然のすべてを包括する彼の偉大な発見を、あれほどまでにすばらしい方法で、独立して定式化した人は誰もいない、ということを否定するのは、もっとはるかに難しいことでしょう。実際、彼の発見についてのいくらかましな評価でさえ未だに欠けているのです。(R. シュタイナーによる注 : この関連で、私たちは、ゲーテが全く理解されてこなかったと言っているのではありません。むしろ、私たちはこの文章の中で、繰り返し、ゲーテの考えを推し進め、洗練させてきたと思われる人たちに言及しています。その中には、フォイクト、ネース・フォン・エーゼンベック、ダルトン父子、シェルバー、C.G. ガルス、マルティウス、その他が含まれます。けれども、これらの人たちは、ゲーテの著作の中で据えられた観点を基礎として、その上に彼らの体系を構築しています。ですから、彼らについて言えることは、彼らは「ゲーテなしに」彼らの概念に至ることはなかったであろう、ということです。他方、ゲーテの同時代人たちは―例えば、顎間骨の場合にはゲッチンゲンのジョセフィ、背骨理論の場合にはオーケンですが―独立してそれらの発見に至っています。)

このような基本的な観点からすれば、ゲーテがある事実を最初に発見したのか、あるいはただそれを再発見しただけなのかを問題にするのは不適切なことのように思われます。と申しますのも、その事実が真の意義を有するのは、彼がそれを彼の自然についての観点に適合させるときのその仕方によってだからです。それはこれまで見過ごされてきたことです。特殊なことがらがひどく強調されてきたのですが、それは不当な挑発や論争を呼び起こすことになりました。確かに、自然の一貫性についてのゲーテの確信はしばしば指摘されてきたことですが、それは彼の観点におけるほとんど重要ではない特徴に過ぎないということに気づくことなくそうされてきたのです。例えば、無機的な科学における主要な目的は、この一貫性の基礎となるものを明らかにするということでしたが、もし、それを「型」と呼ぶのであれば、ゲーテにとって型の本質的な特質とは何か、ということが分かっていなければなりません。

例えば、植物の変容に関して重要なのは、葉、萼、花冠等々が同一の器官であるという個別の事実を発見するということではないのです。そうではなく、相互に貫通する形成的な諸原則から成る生きた総体について思考された壮大な構造が重要なのです。その発見から生じるこのダイナミックな思考された構造は、植物の発達の詳細や個々の段階をそれ自身から決定します。このアイデアの偉大さが―その後、ゲーテは動物界にもそれを拡張しようとしました―私たちの上に啓けてくるのは、私たちがそれを私たち自身の心の中で生命へともたらすように試み、それを再考察しようと試みるときだけです。それは、私たちが、この思考された構造は正に植物自身の本性であり、ひとつの「アイデア」の

形へと翻訳されたものである、それはちょうど対象の中に生きるように私たちの心の中にも生きている、ということに気づく瞬間です。私たちはまた、それを死んだもの、完成された対象としてではなく、進化し、生成し、決して自分自身の内部で止むことのないものとして思い描くとき、私たちは私たち自身で、ひとつの有機体を、正にその最小の部分に至るまで、生命へともたらすのを観察することになります。

次章からは、ここで示されたものすべてを詳細に提示するように試みることになりますが、同時に、ゲーテ的な自然観と今日の自然観、特に現代の進化論との真の関係を見ていくことになるでしょう。